



冬の近代美術館
元気な頃の白髪の一木万寿三がいる

■全道展の新しい出発を目ざして

出席者 伊藤 寿朗・岸本 裕躬・北浦 靖・佐藤 靖・高橋三加子
渡会 純价 (50音順)

本田 シリーズ最終回の座談会となりました。当初20回展台、30回展台の2回に分けていたのですが、欠席する人もいて一緒になりました。まず、皆さんの出品者だった頃に考えていたことを、ひと言ずつ語ってもらいましょう。

高橋 私の初出品は19回だったのですが、全道展を見たのは17回からだったと思います。18回展で箱根さんの「万才シリーズ」だったか生きのいい絵に出会って、私も是非挑戦してみようと思って出し始めたんです。初出品で入選し、その時は岸本さんが協会賞をとった作品に興味したのを憶えています。

—— それまでお父さん（高橋北修）に勧められたことはなかったの。

高橋 勧められたことは一度も無かったけど、学生展に高校生の頃2、3回出したことがあり、本展にもいつかは出したいと思ってました。作品の傾向が、特に粹にはめられていなく、何せ生き生きと自由に描ければ良いと思っていましたし、若さゆえの乱暴もあったかもしれませんが、それから一生懸命取り組む様になりましたね。

—— 岸本君はどうでしたか。

岸本 ぼくは14回展が初入選で、15回と19回に協会賞をもらったんですけど、昭和34年は大学を出て就職した年で、東京から札幌に帰り、その七月に全道展に出品した訳です。あの頃の●会場は、狭い所で、小部屋割の汚ない壁に、アクションペインティングというのか長谷川晶さんとか鎌田さんだったかな、抽象が流行っていた頃で、会場がムンムンとしていて圧倒された記憶があるんです。

—— アンフォルメル全盛時代だったね。岸本君はどここの学校だったの。

岸本 東京の大学で、田中忠雄先生がクラブの講師に来ていたんで、それが、きっかけで行動展に出し始め、札幌にもこんな展覧会があると教えられ、見て初めて全道展を知り圧倒されました。その頃、上野山さんか、木田さんを見かけましたね。

—— いや、木田さんは参画したんだが、出してはいなかった。上野山さんだろうけど、35年には亡くなったからね。その頃は大変な熱気だったね。今は落ち着いてしまっているが。北浦君は何年頃？

北浦 先ほどから考えていたんだけど、だんだん暗い過去を思い出してきました。（笑）僕等の高校生の頃は、まだ学生展は無かったんだけど、油絵を描き初めて展覧会に出そうとすると全道展しか考えられなかった。美唄という土地柄だったのでしょ。8回展に初めての油絵を出しました



旭川巡回展会場にて ありし日の高橋北修（左）、一木万寿三（右）



銅版画啓蒙の為、講習会を開き指導にあたる左から渡会純价、渋谷栄一（昭和41年7月24日札幌婦人会館にて）21回全道展も過ぎて暑い夏だった

が、勿論落ちて初めて札幌に全道展を見にきました。落ちて見る展覧会は勉強になりますヨ（笑）色々なことを思い乍ら真剣に見て、9回展には入選した訳です。美唄には早くから巡回展がきて、創立会員の三雲さんなどのかんりの作品がきて大いに勉強になりました。それと野馬会の野本さん、渡辺真利さんなどが目立って活躍した頃で刺激を受けました。

—— 高校生の頃入選したの？

北浦 高校三年生でしたが、その頃生意気な高校生がアチコチにいて、伏木田さんとか、会は違うけれど小松清さんなどは高校生で賞をとった筈ですよ。何しろ炭礦が景気が良かったので、美唄の山奥にいても色々な展覧会が回ってきました。

—— 三菱美唄に松田さんという人がいて、会友だったが行動展にも出して、その関係で全道展、行動展がいったんだ。

北浦 行動の山中春雄、津田高一などがきて話をしてくれたり、絵の講習会などありましたね。

—— 版画の方はどうだった。

北浦 僕も版画をやっていたからよく憶えているけど、新鮮だったよね。

渡会 全道展は10回展から見えていました。当時は油絵を描いていましたが、33年に駒井哲郎が札幌の学芸大学（現教育大）で銅版木の講習会を開いた時、受講したのがきっかけでした。その時、木版画には北岡文雄さんが

来ていました。銅版画というものは、美術手帖で度々見て知っていましたが、本物を見るのは初めてで、興味深かった。この講習会には一原さんから、まだ小樽に居た河野薫さん、谷口一芳さんも居た筈です。結局本格的に取組んだのは僕一人でしたが、その時助手に渋谷さんがいて、渋谷さんが北海道では初めてでしたね。全道展出品は、その3年後の16回展で、17回展には道新賞をもらい、18回展で会友となりトントン調子で行きすぎましたね。

—— 版画でもエッチング人口が多いが。

渡会 少しエッチングの話をさせてもらいますが、続いて出てきたのが、青美にいた佐藤忠夫さん、そして寺崎さん、東京からきた清水敦さんと、北海道版画協会が36年設立されてから更にエッチング作家展など活発に発表したことなどにもよりますね。全道展でも20回展頃から版画部門が着実に伸びてきました。

北浦 僕も高校、大学で油を出していたんだけど卒業した年に版画を出して13回展で市教育長賞をもらいました。

—— そういえば、全道展で油絵を出している会員が版画を出して良いかどうか問題になったことがあるね。

渡会 小野州一さんが版画を出したことがあり、問題になりましたね。のちに北浦さんの場合が矢面に立たされたんだ。（笑）



26回帯広巡回展（左より）故富谷道信、国松、後藤、岡沼



25回全道展図録の為の座談会風景（左から）岸本、小川原、鎌田、峯田、栃内、伏木田、坂口

北浦 版画で会友になっていたんだけど、お伺いもせずにお絵で一般出品で出しましてね。

岸本 でもすぐ会友になったでしょう。

—— ところで佐藤君、工芸の方はどう？

佐藤 僕は教育大函館で、金属加工研究室に所属して、折原さんに師事しました。42年に卒業しましたが、卒業して初めて全道展に出してみないかと言われ、鉄を扱っていた関係で鉄の作品が入選したことで大変素晴らしいものだとうれしくてどうしようもなかったことを記憶しています。その後札幌に就職したのでリュックをかついで教育大に通い、研究室の2階に泊り、鉄をたたいていました。結婚してから、こんな所まで来ていたんでは仕事にならないから銅板でもやってみれと言われましてね（笑）少しづつ材料を揃えて今日に至っている訳です。25回展に奨励賞をもらったんですけど、全道展には大変なメンバーが揃っていて、すごいなァと言うことを覚えています。

—— 学生の時は出さなかったの？折原君からは言われなかったか。

佐藤 一切言われたことはなかったですね。

—— それでは伊藤君。

伊藤 僕の出したきっかけは、峯田先生が全道展で活躍していましたし、教育大岩見沢の先輩に安田侃さんがいて、夏休み一緒に作っている姿をみ

て刺激になりました。

—— 学生展に出していたろう。

伊藤 42年に大学に入って、その年に道展に出したんですけど、まだどんな会かも判らなかつた時です。学生全道展でも賞をもらいましたが、本展には23回展から出品し、25回に教育長賞をいただいて、29回展位までが学生の頃の仕事を発表していました。本郷先生や本田先生、秋山先生の話聞くのがうれしかったですね。

—— 学生展での活躍が華々しかったのではないか。

伊藤 本展と混合して判らなくなっていました。（笑）あの頃岩見沢に長谷由美子という人がいて、燃えさかってやっていたね。

—— うん居たいた。よく七面鳥など描いていた人ね。同じ位の年齢の人だったの。

伊藤 僕より若いのかな。大谷短大かどこか出て元気のいい人でした。札幌の教育大の出品者が少なかったのは淋しかった。

—— 彫刻は岩見沢分校と函館分校の人達が活躍していたんだ。

伊藤 岩見沢分校に峯田さんが10年いましたが、その頃発表が多かったですね。

—— 僕も10数年集中講義で行っていたんだけど、安田君あたりが中心になってやっていたね。彼が残って仕事していると皆いっしょにやっ



35回展審査風景（札幌ホール）この真険なまなざし
まだ総合審査であった



表彰式道新阿部局長より、後は道新相原氏（道立近代美術館講座）

た。彫刻は自分の道具を持つようになっていくけど、学校の道具を使っていると駄目だな（笑）。

伊藤 あの頃は全道展一色で活気がありましたね。

—— 絵の方はあまり成績はよくなかったので砂田先生によく僻まれてね。（笑）

伊藤 新入生が絵に残らないで彫刻に来たもんです。

—— 三加子さんもそうだが、学生全道展育ちだね。

高橋 14回からでしたね学生展が始まったのは。

—— そうだ。ところで、地方の話に移ると、旭川など出品者も多いんだけど。旭川全体として全道展前という熱気があったでしょう。

高橋 再開された巡回展でなく、以前の巡回では森田喜昇さんや私の父などが中心になっていました。父が脳溢血で倒れてから、一時出品者が少なくなっていました。

—— その点北修さんという人は影響力というか力のあった人なんだね。悪くいうとボスだった。（笑）

高橋 力というか、纏めていくことがうまかったんですね。でも娘としてはクサミを感じました。（笑）25回展からトラックで纏めて搬入する様になってドンドン増えてきた感じです。旭川関係の出品する人達が前もって集まり話し合ったりしたことが、出品者が増えた原因でしょう。昔は道

展一辺倒でしたが、今は出品者も入選者も多いんじゃないかな。

渡会 旭川は道展の方が多いと聞いていたけど、全道展になりましたか。

—— 全体の出品者数はどうかな。

岸本 絵画部門は、ほぼ横ばいでしょうね。

—— 工芸はドンドン増えているでしょう。

佐藤 そうですね、30回から増え続けてきています。全工、陶芸以外の部門の人達が多く出品する様になりました。

—— 版画も増えているかい。

渡会 先ほども話しましたが、20回展頃からエッチングを中心に若手が増えてきました。前田さんや北岡さんが在京でしたから、やはり会員が10人位になって充実してきたといえるのではないのでしょうか。

—— 今会員は札幌に随分いるね。

渡会 版画の場合、他の市町村で教える体制がないので、つながらない様で頭打ちになっています。

—— 絵もそうだけれど、もっと職人的技術も必要だからでしょう。尤も工芸、彫刻もそうだけれど。彫刻も増えてきている様だな。

伊藤 岩見沢の卒業生がほとんど消えてしまいましたね。僕の学生時代前後が全盛で、今は東京の造型大、日大とか金沢などを出て、帰ってきた人達が新しい力となってきています。



よろこびと緊張の受賞者たち（35回展）



35回記念パーティー 女性の進出すさまじく

—— この10年位前までは教育大函館、岩見沢とか、釧路の反旗をひるがえしたグループ展をやっている連中が主流だったのね。今は学校の先生になって安住してしまうのかな。

伊藤 東京辺りから帰って来た若い人たちが新風を吹き込んでいる感じですね。

渡会 版画でも、北海道出身の人達が東京近郊で活躍している人が多いんだけど、故郷にあこがれ全道展に出している人が出てきていますよ。浜西君と水落君などの存在はうれしいですね。

—— 一時、東京の既成作家の全道展入りが度々あり、揉めたことがあったな、今はなかなか大変だけれど。

岸本 会の盛り上がり、14回展辺りから24回展位までであったね。まず会員が一番出ているしお互いに競い合った時代といえる。30回展以降は小康状態となっている。

伊藤 会員の顔ぶればかりではなく、彫刻など展覧会の都度増えてきて、すごい盛り上がりがありましたね。

—— 彫刻でいえば、今80～90点の搬入があるのだが、上野の展覧会でも彫刻部門で100点以上のあるのはそんなにない。全道展は質量とも大変なものだよ。

—— 現在全体的にみて活気では今一つなんだけど、これからの全道展

をどう考えているか、話し合ってみよう。全道展アカデズムというか、マンネリズムというか、若手の台頭が少ないと思うが。

高橋 高齢化しているのは確かですね。

岸本 絵画教室もそうなんだけど、大衆化して活発になってきているけれど、果して深さにおいてどうなのか疑問だ。搬入数の多いことと質の問題は違うからね。

—— 全道展の場合、若い学生の出品が少ない。そういう所の先生に全道展の会員がいないせいもあると思うが。

伊藤 彫刻からみたらそうですね。道具や場所が困難なので、本格的に取り組む人は、東京で勉んできた人達が逆流してくる部分しか期待できないんじゃないか。

岸本 やはり学生運動をしてきた人達、今は30台になっているが、その後出てきていないね。だから穴が空いた様な状態になっている。

佐藤 工芸では鳴海、中川両君が会員になった頃は頑張っていた様だが、仲々体力を使うことだし、1、2カ月ぶっ通しで集中しなければならない仕事なので、その後の人達が続いていない。

—— それと全道展アカデズムみたいなものが、今の全道展にありはしないか。

岸本 それがネックになっている。意識の上で老体化しちゃった。こう



◀30回展審査会員（札幌市民会館前）

いう絵を描くと入選するという。

伊藤 先ほど出た様な熱気のあった人達が会員になり、そのまま高齢化しちゃって、コレステロールがたまっている部分もありはしないか。僕等の年代にもあるのだが。

—— だって一番若いんだぞ。（笑）

岸本 一定の価値基準をもち、頭が堅くなって新しい美術に対する認識が薄れてはいないだろうか。各々自覚はしているのだろうか。そういう眼で若い人達の作品をみているかどうか（一同相槌をうつ）

北浦 僕のように初出品から20数年かかって会員になった人と流星の如く活躍して会員になった人もいて、2種類のメンバーがいると思う。それは一般にも言っても、意欲があって、ある程度の完成度を持った人もいるが、全体的にいうと、こんなのが入るとか、誰れからも文句のつかないというのが多く、新しい方向をもった才能が出てきた方が良いと思う。

—— 全員がよく発見してやるということが大切だ。会員自身が全道展らしさに安住している嫌いがあるのではないか。

渡会 審査方針というのか、審査に当たっての心構えを語り合う必要があると思う。これだけ会員が増えて、マンネリ的審査をやっていると必然的に全道展イズムに陥ってしまう。判っているようで判っていない所だね。

北浦 部門別になると、版画、彫刻、工芸と人数は減るが、絵画部門は



▲35回展会場風景（札幌市民ギャラリー）

減らないんだよな。（笑）単に多数党を生んでしまう。

—— 結局、そこで誰れかが欠陥はあるが、新鮮なものがあるとか、伸びるという発言して、小数意見を大切にすべきだと思う。勿論最終的には挙手で決める訳だが。

高橋 意見の出る作品は賛成にしても、反対にしても、面白さがあるのだから、もう少し議論する方法を考えるべきと思うのですが。例えば反対する意見を出すことは、大変勇気のいることだが、そこでディスカッションする必要がありますね。

岸本 收拾のつかない様なことになって困るけどな。（笑）

—— 出品者側が、全道展イズムに合わせて出してくる傾向が強いんじゃないか。

渡会 どの展覧会にいてもあると思うけどまだ全道展は間口をもった会だが、事大主義が幅をきかしてきているのでは——。

伊藤 僕等が出品した頃は熱気とか活気というか、スケールの大きさがあり、その様な創作活動をしていれば、間違い無いと思っていた。

—— そんな意味では、伊藤君の腰掛けた木彫の仕事なんか、今まで最高だと思う。びっくりしたもんだヨ。

伊藤 あの頃はガムシャラでも、良い所をみつけて、採ってくれる、全道展にそんな概念というか、期待をもっていました。



30回展菊地精二遺作コーナー（左、菊地未亡人と栃内忠男）

渡会 だからその人間の個性の部分重要視しないといけないと思う。その作家の個の部分で討議してゆくべきでしょう。作品をみて毎年入る作品だとして、手を挙げてしまっていることがあるが、観念的になっているのは怖いことで、ここでストップをかけて発言してもらうことも大切だ。

—— 結局若い人が、全道展に魅力をもつということは、会員の態度、考え方だと思うんですよ。会員自体の仕事もそうなんだけど、その芽をどうやって育てるかということが、全道展を育てることになる。結論が出たが——。

佐藤 我々も一般出品の頃は、只、入ればうれしいと思っていた訳だけど、会員になれば会の運営から大変な仕事をしているなと思いました。一般出品者からすれば、新しいものを一つ掴まないと、次の仕事が見えない訳で、会員としても新しいものを見つけてやらなければいけないと思うんですよ。

渡会 僕も全道展で育てられたと思っているんですが、全道展という会よりも、こんな素晴らしい作家がいて、その作家の作品と並列される喜び、そこに勉ぶ点があれば良いことだった。そこで作家も、全道展も育ててゆくんだね。

—— これを機会に全道展を続けていって良いのか考える必要があると思う。

北浦 そこまで語って良いのなら、そう思いますね。緩選にしたら良いという訳でなく、厳選でも結構なんだが、オリジナリティを持ったものを、下手でも採り上げていく姿勢が欲しい。

—— 若い人が減ってくるということは、魅力がないということだ。あの20回展の頃の熱気があるか、どうかだ。

北浦 やはり会員の所に帰る問題ですね。会が大きくなるに従い、会員になっただけで安心する人が出ている。絵描きの40、50台はまだまだだが、何か成熟した感じをもってしまふのかな。自分の制作態度がね。

岸本 せめて自分の作品を高め、発表する熱気をもたなくてはいけない。その熱気が若い人に伝わっていくんだ。お付合いで出してくる人がいては困ります。お客様の意識を失くしてもらわなければいけないね。

—— 会員各自の仕事に対する誠意といわなくても、作家意識ではないですか。会員という切符は、目的なしの山手線の切符ではなく、きちんとした目的を持った切符でなければいけない。

伊藤 ずるい言い方だけど、いつまでも怒られていたいという感じです。先輩や仲間からでもいいという甘えがあるが、年一回その集いであって欲しいと思っています。

—— 今一つ難しい問題だが、毎年会員、会友が増えてきて、定った壁面に並べる訳で、入選作も厳しい状況下におかれる。それをどう考えるか。

岸本 部門毎の展覧会を考えなくては。

—— 全部門が並んで、初めて全道展だからそうなりたくないがね。

渡会 佐藤さん、工芸部門は伸び率からいえば、一番多いんでしょう。

佐藤 ええ工芸素材も多くなってきていますから大変なんですけど、良いもの、新鮮なものを取上げてゆく様にしたいですね。

—— これからの全道展として話題で出ているのだけれど、審査会、総会などで真剣に話し合うべきだろう。会の本質の問題だからね。

これでこの座談会を終わりにいたします。ありがとうございました。



函館ハリスト正教会にて(左から)折原、竹岡和田男氏、橋本(三郎)、宮西、小川原、一人おいて箱根夫人、箱根、戸次夫人



もて、もて佐藤忠良(58年、きりたんぼ田村で)道立近代美術館開催の佐藤忠良展で来札した夜。



ヤレヤレ昼食(札幌ホール)



38回展版画会場



同 工芸会場



38回展審査 名調子、栃内忠男進行係



小樽の夜に集う全道展元事務局の顔ぶれ（'85春寒）



40回展総会 久守次長の会計報告に真険に取組む出席会員



40回展絵画部審査「俺は挙げる」「俺は挙げない」

戦後の混乱の中から、当時戦渦をさけて北海道に疎開していた、30台40台の画家たちが中心になって、発足した新しい展覧会全道展も今年で40年。

昭和21年第1回全道展をひらいてから、今年昭和60年で第40回展を迎えることが出来た。

当初21人の会員ではじまった全道展も141人の大きな世帯となった。

疎開して来ていた人たちが東京へ帰ったら、全道展はつぶれる、と言われながらも40周年を迎えられるのは、創立の会員の強力な力は勿論だが、それに続く人たちの献身的な努力があったからこそである。

その間、沢山の優れた作家たちを生み、育てて来たことは、衆目の一致するところだろう。しかし、40年続いたことは目出度い、と祝い、140人を越える会員の数をよろこぶだけでいいだろうか。

40歳という年齢は、人間でいえば成人であり、働きざかりである。だが、血圧はどうだろう、コレステロールが——等々所謂成人病の心配も起る年齢でもある。

全道展も40年という、一つの節目の年を迎え、情性から生まれるマンネリズムがありはしないか、組織にコレステロールがたまっていないか。この時こそ謙虚に、しかも真剣に自己批判することこそ必要なことではないだろうか。

私は30周年の時に、巷間あやまり伝えられている部分もある創立前後の事柄を、出来るだけ正確に残しておこうと「全道展 そのなりたち」という一文を書いた。活字こそが歴史として残るものである、という考えからその作業がはじまった。

この40周年の時に当って、全道展発足当時から40年の歩みを、どんな形で綴ろうかと、編集委員がよりより討議の上、座談会という形式が考えられた。

創立前後、第10回展まで、20回展までと10年ずつに区切り、20回以後は40回までをいっしょにして、四つの座談会を組んだ。そして、創立会員、それぞれの年代に会員になった人たちに、話をしてもらおう形をとった。出席者は毎回違う人が出席するわけだけれど、一貫した流れにするために、私が一人で司会をつとめたが、行きあたりばったりの司会なので、これはうまくいったのかどうか自信がない。

そんなわけで、重複するところも多々あるが、それぞれの世代の見方、

考え方があって面白い、とそのままのせることにした。

四つの座談会で、これからの全道展はどうあるべきか、どうしなければならないか、をそれぞれの世代の人たちに語ってもらった。その中には、全道展の現状に対する強烈な批判、会員自身の反省が多く語られている。この冊子は全道展関係者以外にも多く見られるものであるから、全道展の恥部をさらすようで、躊躇する気持もあったけれど、発言者たちの、全道展をいつも新鮮な、よりよい展覧会にするための真摯な発言を発表することこそ、これからの全道展のために必要なことだと考え、敢えて掲載したわけである。

座談会をテープに録音し、それを文字に綴るという仕事は、素人の私には困難な作業であった。発言者の意図が正確に表現できたかも不安である。そしてこの40年の歴史という、記録的な要素からはずれてしまったようでもある。歴史としての記録は50周年の時にでも誰かに、正確に書いて残してもらいたい。

創立から40年の間には、座談会の中にも出てくる、実に沢山の人々に協力していただいたわけである。中根さん、北海道新聞社、●今井、道立近代美術館の方々。陰の力となって全道展を支えてくださった多くの方々に、心からお礼申し上げます。

21人ではじまった全道展が、今は141人もの会員数になったとは、初めに書いた。しかし、この40年の間に、また幾人も先輩、友人たちが、幽明界を異にし、この40周年に、共に祝盃をあげることが出来ないのは淋しく悲しい。冥福を祈ること切である。

四〇周年記念全道展画集訂
正個所

(座談会・全道展40年)

P 155 写真部分 大本靖を消す

P 160 上右写真 国井登↓澄

P 161 右下から三段 谷口王次郎↓谷口
玉二郎

P 171 左上 野本 淳↓野本 醇

右上から6段 天馬正五郎↓天間正五

P 183 出席者名 北浦 靖↓北浦 晃
郎